



私は一九五七年から六〇年にかけての約三年余を、イタリアのナポリで過ごした。いうまでもなくイタリアは欧州随一の観光国で、毎年数多くの外国人観光客をひきよせている。中でもナポリはイタリアの主要観光地の一つで、その風光明媚なこととにも、附近にポンペイ、ソレント、カプリなど訪れるところが多く、観光客の絶えることがない。

ポンペイはナポリから電車で約一時間の郊外にあり、いうまでもなく、紀元七九九年にベスピアス火山の大噴火の際に埋まってしまった街を近年掘り起こしたところで、約二千年昔の建物や、その内部がそのままの姿で眼前にみられることは、まったくほかでは得られぬことで、いつでも多くの見物客でにぎわっているが、本当に恵まれた観光資源を持っているものと羨しい限りである。

このポンペイに限らず、この国の文化遺産はほとんど國家の手で保護管理されているようであるが、何れもそこに入るにはかなりの入場料をとられる。文化遺産を訪ねる人々から入場をとることはどの国でも行なわれていることで、さして珍しいことではないが、自然の対象物に対しても、相当の入場料を課していることが多いのには驚かさざる。

やはりナポリの郊外にソルファタラといって、登別の地獄谷をきわめて小規模にしたような火山活動のみられるところがあるが、日本ではまったく珍しくないこのようなどころも、西洋の人々には興味があるらしく、相当の料金をとられるのにもいつも多くの人々ににぎわっていた。ここもたしか國の管理下に置かれていたように思うが、訪れるのに相当の料金はとられても、そのため管理が行き届くのであればそれも致し方ないことなのであろう。

イタリアにおける自然保護については、系統だてて調査したわけではないので、じゅうぶんなことは分からないが、私の滞在した当時は、日本などくらべても自然保護はそれほど進んだものではないように思えた。もっとも、私の滞在地がほとんどナポリに限られていて南イタリアであったからで、すべてに進んでいる北部ではもう少

しちがっていたということも考えられる。日本でも各地に臨海実験所があつて、主に大學関係者による種々の研究教育が行なわれているが、近年その実験所の近くの観光開発とか、あるいは都市化などのために研究材料である附近の海の動植物が眼みえて荒され、減少してゆき、早急の対策が望まれている。

古くから有名なナポリの臨海実験所でもまったく同様であつた。特にナポリの実験所は、ナポリという人口約百万の大都會に設けられているために、その附近の海の汚染は甚だしく、古くから研究材料として有名だった動植物で、現在ではその採取がきわめて困難となつているものが数多くに達していた。もちろんナポリの実験所でも、市や港湾当局に強い陳情をしているようであつたが、そのききめは少ないらしい。

ただ向うでは、日本と少しく異なつていると感ぜられたことは、子供をふくめて一般の人々が海の動植物を、それほどむやみに乱獲していないようにみえることである。ナポリの浅海にもウニ、イカ、カキ、アサリなどがすみ、それらは魚屋の店頭にも並べられているが、日本のように人々がそれらを海岸で獲っているのをあまりみかけることはなかった。日本では夏休みの宿題などに、子供に動植物の観察やまた標本

自然保護雑感



作製などを課することが多く、それは生物学の勉強のためもあるので、一概にはこれを非難するわけにもゆかないとは思われるが、これは国民性のちがいのということも大いに関係していることと思われる。

イタリアには、日本のような国立公園がいくつもみられる。それらは概して北部、中部の山岳地帯に多く、主に大形の哺乳動物がそこでは嚴重に保護されているようであった。

欧州から帰国して数年後、一九六五年に米国およびカナダを短期間訪れる機会もあった。米国では主として、北部太平洋沿岸のカナダとの国境に近い小さな島にある大学附属の研究所に滞在した。

このあたりには小さな島がいくつもあって、そのうちの一つのオーカス島というところには、小規模の州立公園があった。そ

こはほぼ自然の状態の森林の公園で、小さな山や湖水なども含まれており、主に夏の期間、自動車で家族が訪れ幾日かのキャンプを楽しんでゆく、といったようなところで、米国内にはいたるところにみられるこの種の公園の一つと思われるようなものであった。

米国は日本やイタリアよりは遙かに「富める国」であって、資源ばかりでなく資金もじゅうぶんのためか、その公園の管理などについては掃除などもきわめて行届いており、また、その公園内には売店、飲食店なども設けられていないようであった。これは、自動車が発達しているという日本などとはちがったことも関係しているのではあるが、やはり公共の公園というものを汚したり傷めたりしないようにと、気をくばる人々一般の心がけにもよるのちがいない。

米国の滞在の後に、友人を訪ねてカナダのエドモントンに数日間滞在した。バンクーバーからエドモントンまでの数時間の飛行中は、眼下に晩秋の新雪におおわれたロッキー山脈の山々が美しかった。エドモントンでは、旧知の若いカナダ人の動物学者とそのイタリア人の夫人のもてなしを受けたが、たまたま話題が冬期オリンピック大会のこととなったとき、その動物学者(鳥

の生態学の専門家)から

「この近くのバンフ国立公園にもスキー・スケートの好適地があり、カルガリ市でもオリンピック大会の招致を望んでいるがわれわれ生物学者は自然保護という立場から反対のキャンペーンをしている。同じく札幌も候補地となっているときいてあなたがあなたのほうではどんな反対運動をしているのか」とたずねられた。

私は「すぐに札幌にきまる可能性は少ない、具体的には組織立った反対運動はしていない」などいい加減な返事をしたように覚えていた。そして帰国してその翌年春、思いがけなくオリンピックは札幌ときまり新聞などによるとカルガリが駄目になったのは、地元からの自然保護という点での反対があったことが影響している、ということであった。

オリンピックの札幌開催はもう正式にきまったことだし、そのために人々の得ることも種々多いことにはちがいないが、私はいまでも一昨年秋のエドモントンでの友人宅での一夜のことをいつも思い出す。今度のオリンピックの組織委員会にはわれわれの大先輩の木原均先生もおられることであるし、今度の札幌大会では可能な限り、自然の破壊が少範囲にとどまることを期待している。

(北大理学部教授)